

～旧約聖書を読んで感じること～ (78) ヤロブアムの妻

ダビデとバト・シェバの最初の子は生後 7 日目に死にました。ヤロブアムの最初の子アビヤも幼いうちに死にました。幼児の死はあまりにも悲しいものです。聖書では親たちの悲しい罪を身に負ったかのような姿として描かれています。

ヤロブアムは王として、北の 10 部族をまとめる必要がありました。又、ユダ王国と対峙し、拮抗させる必要がありました。権力を守るために、民の精神的支柱であるための立派な祭壇を作りたいと願いました。祭壇の前でヤロブアムは「祈った」のではなく、華麗な式典を「自ら演出した」のです。



アヒヤの言葉を聞くヤロブアムの妻

George Henry Grenville Manton

彼が、ティルツアに移っていた時、息子アビヤが病気になるしました。ヤロブアムは妻に言いました。

「立って、ヤロブアムの妻だと知られないように姿を変え、シロに行ってくれ。そこには、わたしがこの民の王になると告げてくれた預言者アヒヤがいる。パン十個と菓子、それに蜜を一瓶持って彼のもとに行け。彼なら幼い子に何が起こるか教えてくれるだろう。」(列上 14:2-3)

ヤロブアムの命令は非常に奇妙です。身分、素性を知られないように。また、お土産は普通のささやかな品物です。

ヤロブアムは(1)アヒヤを恐れつつも、その言葉を聞きたい、(2)偽装させ、辛い仕事を妻に代わりに行わせている、(3)預言者への捧げ物を出し惜しみしている、(4)息子が助かるのか、助からないのかを知りたいのだと読み取れると思います。ヤロブアムの心の闇を感じます。彼は怯え、隠れ、妻に偽らせ、息子の命を救ってほしいという、本当の心の願いを持ち得ない、愛情の薄い夫、父です。

ヤロブアムの妻は夫の命じるままに出かけて行きました。病気の息子を置いて行くのは不安があったでしょう。また、身分、素性を隠すことは疾しいことがあるからだと思わずにはいられないでしょう。彼女の心は「私の幼い息子の命を助けて下さい」という祈りで一杯だったと思います。

老齢になって目が見えなくなっているアヒヤは彼女を足音で見破り、彼女が一言も発しないうちに「ヤロブアムの妻よ、入りなさい。なぜそのように変装したのか、私はあなたに辛いことを告げるように命じられている」とヤロブアムの妻を優しく受け入れました。けれども夫ヤロブアムについては「あなたはこれまでのだれよりも悪を行い、行って自分のために他の神々や、鑄物の像を造り、主を怒らせ、主を後ろに捨て去った」とその罪をはっきりと告げました。「自分のために」という言葉は神を権力のために利用したという意味です。アヒヤの言葉は激しく、ヤロブアムの家の男子はみな、「汚物、犬に食われ、鳥の餌食になる」と罵るように言っています。けれども、再び妻に優しく声をかけました。

あなたは立って家に帰るがよい。あなたが足を町に踏み入れるとき、あなたの子は死ぬ。イスラエルのすべての人々はこの子を弔い、葬るだろう。まことにヤロブアムに属する者で墓に入るのは、この子一人であろう。ヤロブアムの家の中でイスラエルの神、主にいくらか良いとされるのはこの子だけだからである。(列上 14:12-13)

アヒヤは息子の死を告げると同時に、息子を愛おしみ、悼む思いを語っています。妻は悲しみに打ちのめされたでしょう。また、夫の罪をしっかりと知ったでしょう。息子は母が帰るのを待って死にました。辛くてもヤロブアムの妻は息子が「いくらか良い」と言われたことが慰めとなったでしょう。

ヤロブアムは在位期間 22 年を経て眠りにつき、次男ナダブが代わって王となりました。